

考古学者・甲野勇の太平洋戦争

——「編年学派」と日本人種論——

Kono Isamu in the Pacific War Period

—“School of Chronology” and the Origins of the Japanese—

坂野 徹

SAKANO Toru

要 旨

本稿では、戦前日本における縄文土器をめぐる研究をリードした研究者の一人である甲野勇の戦時中の活動を検討し、太平洋戦争と考古学の関係について考える。

東京帝国大学理学部人類学科選科で学んだ甲野は、1920年代中盤以降、同窓である山内清男や八幡一郎らと協力しながら、縄文土器の編年に関する詳細な研究を推し進め、彼らはいつしか「編年学派」と呼ばれるようになった。「編年学派」は縄文土器の編年を確立することで、明治期以来、土器を残した「人種」の問題と関わっていた考古学研究を人類学研究から切り離すことを目指したが、一方、彼らの研究は、1910年代後半に始まる「日本人種論」の新たな動きを前提にしたものでもあった。

甲野は、太平洋戦争期になると、厚生省研究所人口民族部で嘱託として勤務を始めるが(1942年)、そこで彼が実施したのが、有名な『大和民族を中核とした世界政策の検討』と題する膨大な秘密文書中における考古学的解説の執筆である。そこでは、甲野自身が1935年に発表した編年研究の成果が再掲されるとともに、かつて禁欲したはずの「日本人種論」についての議論が記されている。ここには、大東亜共栄圏構想下、戦争協力を行った考古学者として知られる後藤守一の影響がうかがえる。

戦後、かつての甲野の同志である山内清男は「縄文研究の父」として高い評価を受け、戦争協力者の代表格である後藤守一も復権を果たし、戦後考古学を率いていくことになる。だが、甲野勇は、戦後考古学の主流から距離を置き、博物館建設への尽力など独自の活動を進めていった。ここには甲野なりの戦争への反省の姿勢がみてとれる。

【キーワード】 甲野勇、編年学派、日本人種論、山内清男、後藤守一

目 次

- I はじめに——考古学と太平洋戦争
- II 甲野勇と「編年学派」
- III 「編年学派」と日本人種論
- IV 甲野勇と大東亜共栄圏構想
- V むすびにかえて——リベラリスト・国学者・縄文研究の父

I はじめに——考古学と太平洋戦争

他の学問領域と同様、太平洋戦争中、日本の考古学が戦時体制と無縁でありえなかったことはいうまでもない。そして、そのことは、戦中・戦後を生きた考古学者にとっては自明のことでもあった。実際、日本敗戦後、戦争協力の過去に口を閉ざした研究者に対する同時代人による批判も存在する。例えば、1964（昭和39）年に発表された近藤義郎「戦後日本考古学の反省と課題」は、戦時中の日本考古学について、「ごく一部には、皇国史観に積極的に妥協し追随し自らの科学性を犠牲にした研究者も生じた」と指摘している¹⁾。また、「縄文研究の父」とも呼ばれる山内清男（1902-1970）は、戦後まもない頃、戦時中に皇国史観を考古学の立場から支えようとした研究者の代表格である後藤守一（1888-1960）を「文化戦犯」と呼び、その戦争協力の姿勢を非難したのだという²⁾。

だが、このような同時代の考古学者自身による批判もある一方、従来の考古学の学説史においては、太平洋戦争期、考古学のような学問は全体として敬遠され、「足踏みの状態」に置かれたが、皇国史観による抑圧から解放された1945（昭和20）年以降、古代の真の姿を明らかにする学問として、社会からの期待に応えようとしたという物語が語られてきた³⁾。こうした考古学の自己認識は、たとえ少数の「文化戦犯」がいたとしても、大部分の研究者は免罪されるという意味で、戦後の日本考古学にとって都合のよいものであったことも確かである。

こうした従来の日本考古学の物語に一石を投じたのが、1997（平成9）年に刊行された坂詰秀一『太平洋戦争と考古学』であった。坂詰の著作は、戦後の日本考古学が国内の遺跡発掘を中心に発展したこともあり、なかば忘却された、戦前アジア各地の植民地・占領地で行われた調査研究（「東亜考古学」）を跡づけるとともに、戦時中の皇国史観と考古学との関わり（「肇国の考古学」）について具体的に検討した⁴⁾。坂詰の著作刊行後、少しずつではあるが、太平洋戦争期の日本考古学に関する検証も進みつつあるようにみえる。

なかでも興味深いのは、日本考古学の中でも、研究領域によって皇国史観との関わりには違いがあったという溝口考司による指摘である。現時点における縄文研究の到達点を示す講座（『縄文時代の考古学』2010年）に収められた論考で、溝口は、戦時中（戦前）、弥生時代以降を対象とする研究は天皇制（「国体」「皇統」）の問題と抵触する可能性をもつがゆえに「危険な研究領域」であったのに対し、石器時代（縄文）研究は「比較的 안전한研究領域」であったと述べている⁵⁾。

溝口の論考は、他にも興味深い指摘が多く、示唆的なものであるのだが、では太平洋戦争中、弥生時代以降を対象とする考古学者が「肇国の考古学」に巻き込まれるか、沈黙するかという二者択一的な状況に巻き込まれたのに対して、縄文時代を対象とする研究者は戦時体制と無関係に研究を進めることができたということなのだろうか。例えば山内清男の後藤守一に対する「文化戦犯」という非難も、後藤とは異なり山内が皇国史観と抵触する可能性が低い、「比較的 안전」な縄文研究を専門としていた研究者だからこそいえた言葉ということなのだろうか⁶⁾。

こうした問題意識に立ち、本稿では、太平洋戦争と日本考古学、とりわけ縄文研究との関わりを考えるため、山内と並んで1930年代以降の縄文土器をめぐる研究をリードした研究者の一人である甲野勇（1901-1967）に焦点を当て、彼の戦時中の活動について検討してみたい。

山内清男、甲野勇、八幡一郎（1902-1987）という、いずれも東京帝大人類学教室（選科）を出た三人の研究者は、しばしば「編年学派」と呼ばれるが、ここで甲野を取り上げるのは、彼が戦時中、厚生省研究所人口民族部に勤務し、戦争遂行と関わる研究を行った人物でもあるからである。

甲野の「戦争協力」——ただし、後述するように、甲野は根っからのリベラリストで、権威や軍人を嫌ったといわれており、戦時下の厚生省研究所勤務は不本意なものだったとも考えられる——を検討することで、縄文研究と太平洋戦争との関わりについて考えたい⁷⁾。

そして、戦時下における甲野勇の活動を考えるための補助線として、本稿では、甲野と山内清男、後藤守一の関係に着目する。冒頭に挙げた山内の後藤に対する非難の言葉からうかがえるように、山内と後藤は一見すると対極に位置する研究者だが、甲野の彼らとの交錯を跡づけることで、考古学者の「戦争協力」の実相に近づこうというのがここでの目論見である。

さらにまた、こうした問題と関連して、本稿で考えたいのは、甲野を含む「編年学派」と日本人起源論（いわゆる日本人種論）の関係である。「編年学派」が推進した縄文土器の編年によって、日本考古学は明治期以来の人種論から脱却し、現在にいたる縄文研究の基礎が確立したといわれるが、彼らが縄文土器を残した「人種」への関心を持っていたことも確かである。本稿では、甲野らの1930年代以降の言説の分析を通じて、考古学と日本人起源論の関係についても新たな光を当てられればと思う。

II 甲野勇と「編年学派」

まずは最初に、甲野勇が厚生省研究所に勤務するに至るまでの履歴を確認しておく。

甲野勇は1901（明治34）年、東京日本橋の薬研堀に生まれた。父親である^{たすく}榎は東京開成学校で学んだ眼科医であり、大学で眼科の講義を行う一方、宮内庁の侍医療もつとめた人物である。母・たきは幕末の儒学者・^{おつこつたいけん}乙骨耐軒（1806-1859）の孫娘であり、八幡一郎によれば、甲野家は明治期の学問で大きな影響力をもった箕作一門とも近親縁者であるというから、幕末以来の名門知識人家庭の出身といってよいだろう。少年時代、母方の大叔父の影響で考古学に関心をもったが、学校生活にあまり馴染まなかったためか、正規の学歴コースを進まず、1922（大正11）年、東京帝国大学理学部の人類学選科に入学する⁸⁾。

1939（昭和14）年に人類学科が開設されるまで、東京帝大の理学部人類学教室（1892年創設）は正式の学科ではなく、専門的に人類学や考古学を学ぶには選科生という制度しかなかった。1916（大正5）年には新たに京都帝大文学部に考古学研究室が創設されたが、戦前の日本にあって、人類学・考古学を専門的に学べる高等教育機関は、基本的に以上の東京・京都二つの帝国大学に限られていた⁹⁾。いずれにせよ、戦前の日本では考古学の制度化は進んでおらず、いきおい考古学の研究を志す者の多くが在野で活動することを余儀なくされる時代であった。

甲野は、先史考古学から民族誌まで幅広い関心をもつ研究者であったが、彼が東京帝大の人類学選科に入学した当時、同教室には、山内清男が1919（大正8）年、八幡一郎と宮坂光次（生没年不明）が1921（大正10）年から選科生として学んでいた。学生時代は、民族学・先史学については鳥居龍蔵（1870-1953）、形質人類学や人種学は松村瞭（1880-1936）、樺太の人種・文化は石田収蔵（1879-1940）、解剖学は小金井良精（1859-1944）、言語学は金田一京助（1882-1971）から講義を受けたのだという。

1925（大正14）年3月の選科卒業後、甲野は人類学教室の副手となり、さらに翌年には、明治の元老・大山巖（1842-1916）の次男であり、軍人・公爵でありながらドイツで先史考古学を学んだ大山柏（1889-1969）の設立した大山史前学研究所に入所する¹⁰⁾。また、1928（昭和3）年に甲野は、広義の人類学（自然人類学、考古学、民族学）に関心をもつ若手研究者により結成された人文研究会にも参加している。人文研究会には、考古学から甲野以外に八幡一郎、宮坂光次、森本六爾

(1903-1936)、中谷治宇二郎(1902-1936)、赤堀英三(1903-1986)、江上波夫(1906-2002)、自然人類学から大島(須田)昭義(1900-1990)、民族学・社会学から岡正雄(1898-1982)、小山栄三(1899-1983)など、その後、各方面で活躍する多彩な研究者が集まった。人文研究会の人脈は、日本民族学会(現在の日本文化人類学会)設立の母胎となったことで知られるエイブ会(Anthropology, Prehistory, Ethnologyの頭文字、APE)結成(1937年)にもつながる¹¹⁾。

ところで、後述するように、1910年代後半から20年代にかけては日本の人類学・考古学における転換期であり、甲野を含めて、当時、東京帝大の人類学教室で学んでいた若者は、日本最初の考古学研究室を主宰する京都帝大の濱田耕作(1881-1938)をはじめとする新世代の研究者から大きな刺激を受けることになった。特に、古生物学者でありながら、1910年代に縄文土器に関する「進化学」的研究を開始していた松本彦七郎(東北帝国大学理学部、1887-1975)の影響を受け、山内、甲野、八幡の三人は、1920年代中盤から、縄文土器の型式を細かく分類し、それらの前後関係や年代を配列する研究を共同して進めていく。

彼ら三人の研究成果は、山内「日本遠古之文化」(1932-1933年)、八幡「日本石器時代文化」(1935年)、甲野「関東地方に於ける縄文式石器時代文化の変遷」(1935年)などにまとめられ、1930年代後半、彼らは、周囲から——誰が最初に命名したかは定かではないようだが——「編年学派」と呼ばれるようになる。ちなみに、選科卒業後、後述する東北帝大医学部の長谷部言人(1882-1969)のもとで副手としてつとめることになった山内は東北と関東、東京帝大人類学教室の副手となった八幡は彼の出身地である信州と関東、さらに史前学研究所入りした甲野は関東地方の縄文土器を主たる研究対象としていた。

先に述べたように、「編年学派」による縄文土器の編年体系の確立によって縄文研究の基礎ができあがり、特に山内清男の論考は、考古学史上に輝く金字塔として高く評価されている。ただし、当初、「編年学派」の主張に賛同する考古学者は必ずしも多くなく、そうした中、史前学研究所から刊行されていた学術誌『史前学』に掲載された甲野の論考は、「編年学派」の支持者を増やすのに大きな役割を果たしたといわれる¹²⁾。

また、同時期、甲野は、人類学・考古学・民族学・民俗学の一般向け雑誌として岡書院から刊行されていた『ドルメン』(1932年創刊)編集の手伝いをするようになる。岡書院の倒産にともなって『ドルメン』が廃刊(1935年)¹³⁾となった翌年には史前学研究所を辞め、自ら翰林書房という出版社を設立、『ドルメン』の後掲誌を目指して創刊した『ミネルヴァ』の編集・発行に携わるようになった。『ミネルヴァ』は、考古学史上、山内清男と古代史家・喜田貞吉(1871-1939)による「ミネルヴァ論争」が行われた雑誌として名高いが、この論争のきっかけとなったのが、同誌創刊号に掲載された「日本石器時代文化の源流と下限を語る」という座談会であり、ここには甲野の司会で、後藤守一、山内清男、八幡一郎、江上波夫が出席していた¹⁴⁾。

だが、『ミネルヴァ』も1937(昭和14)年2月に廃刊となり、その後、甲野は、山岡書店から刊行された『民族文化』(1940-1943)、『あんとろぼす』(1946-1948)など、一貫して人類学・考古学関係の雑誌編集に関わり続けた。こうした社会に向けた広義の人類学的知識の普及に対するこだわりは、戦後の考古学博物館設置運動への傾注につながることもなる。

さて、この間、甲野は1940(昭和15)年に東京帝大人類学教室の嘱託、翌41年には、若手研究者が中心となって活動していた三つの民間学会(東京考古学会、考古学研究会、中部考古学会)が糾合して結成された日本古代文化学会の委員に就任している。そして、ここで見逃せないのは、この日本古代文化学会が、戦時中、時局に迎合し、翼賛的な活動を行ったといわれる組織であり、委員長に冒頭で述べた後藤守一が就任していることである。上述したように、甲野(および山内)と

後藤の接点は、少なくとも『ミネルヴァ』刊行時代にまでさかのぼることができるが¹⁵⁾、ではそもそも後藤守一とはどのような研究者だったのだろうか。

1888（明治21）年、静岡県に生まれた後藤は、静岡師範学校、東京高等師範学校（本科地理歴史部）で学び、1918（大正7）年、東京帝室博物館入りした。これ以降、後藤は、帝室博物館を拠点に、有職故実の方法・知識に基づく遺跡などの研究を進めていく。だが、1940（昭和15）年、ある事件の責任をとって帝室博物館監査官を辞職、翌41年2月に結成された日本古代文化学会の委員長となった。同年4月、國學院大学国史学科教授となるが、1945（昭和20）年8月の敗戦直後、同大学を辞職する。その後、戦後の日本考古学再建の出発点となった登呂遺跡発掘調査実行委員長（1947-1950）をつとめ、さらに1948（昭和23）年からは明治大学文学部教授として、多くの後進の考古学者を育てた。

以上の経歴からも分かるように、戦前から戦後にかけて、一貫して日本考古学のメインストリームで活動した考古学者だが、一方で、帝室博物館につとめる「国学的な社会観」の持ち主でもあった後藤は、太平洋戦争期、「日本精神」を称揚する考古学書を数多く発表し、皇国史観を考古学の立場から支える活動を進めていった¹⁶⁾。とりわけ彼が主導した日本古代文化学会は「日本及ヒ東亜ニ於ケル古代文化ノ調査研究ニ努メ以テ皇国宏謨ノ由ツテ来ル所ヲ解明スルヲ以テ目的トス」（「日本古代文化学会会則」）とうたい、時局的な言論が多く掲載されたことで知られ¹⁷⁾、後年、山内清男は、この学会を「右翼学者の団体」と罵倒することになった¹⁸⁾。

Ⅲ 「編年学派」と日本人種論

ここで一旦、1910年代に話を戻す。先に触れたように、甲野が人類学選科で学び始める直前の1910年代後半は、日本の人類学・考古学における転換期に当たっていた。例えば、山内清男は、日本における人類学・考古学の当時の状況について次のように回想している。

この時代、大正5、6年頃 [= 西暦1916、1917年、筆者注] は、日本の人類学、考古学界に於ける転換期に当たっていて、大学の増設、講座の充実も行われ、多くの新進学徒が各地に頭角を現しつつあった。京大考古学教室を中心とする濱田博士は、着実な考古学的調査を進められ、京大医学部の清野博士、仙台東北大の長谷部博士、松本博士等も石器時代の研究に着手されつつあった。かくて、旧来のアイヌ説は批判を受け、又縄紋式以来住民の血も文化も後代に続いていると云う新しい考説が現れるに至った¹⁹⁾。

この述懐で述べられているように、ヨーロッパ留学から戻り、1916（大正5）年より京都帝大の考古学教室を主宰することになった濱田耕作は、最新の考古学理論を積極的に紹介するとともに、翌17年の大阪・国府遺跡を皮切りに、日本各地で本格的な発掘調査を実施し、その報告書の刊行を進めていく（『京都帝国大学文学部考古学研究報告』シリーズ）。考古学の学説史上は、濱田によって型式学的研究法と呼ばれる最新の考古学研究法が導入されることで、様々な考古資料が系統的に体系づけられるようになったと評価されている。

この引用文中で述べられている、「新進学徒」による「石器時代の研究」とは、濱田耕作、長谷部言人、松本彦七郎、清野謙次（1885-1955）という、いずれも1880年代生まれの研究者²⁰⁾が、1910年代後半から20年代にかけて、日本人起源論（日本人種論）の領域で、従来とは異なる主張を発表していったことを指す。

明治期以来、日本の人類学においては、石器や土器を残したのは「日本人」の祖先とは異なる先住民族であり、かつて日本列島上で先住民族と「日本人」の祖先との間で闘争が行われた結果、「人種」の交替が生じたと一般に考えられていた（かつて拙著では「人種交替パラダイム」と呼んだ）。その先住民族の正体はアイヌ民族か、それともアイヌの伝承中に登場するコロボックルかという論争も繰り広げられたが（アイヌ＝コロボックル論争）、1913（大正2）年、東京帝大人類学教室教授として長年にわたり、日本の人類学・考古学を率いてきた坪井正五郎（1863-1913）の急死にともなって、コロボックル説は霧散し、小金井良精や鳥居龍蔵らが主唱するアイヌ説全盛の時代が到来するかにみえた。

しかし、1910年代後半になると、濱田ら新世代の研究者たちは、こうした日本列島上における「人種」間の闘争・交替自体を否定し、石器時代から現在にいたる日本列島上における「人種」の連続性を主張し始めることになる。まず濱田耕作は、先に触れた国府遺跡における発掘に基づいて、縄文土器を残した人々と弥生土器を残した人々を「異人種」と考える、従来の発想に対する批判を開始（1918年）、これに続いて東北帝大の松本彦七郎の「汎アイヌ説」（1919年）、長谷部言人のアイヌ説批判（1919年）など、従来の「人種交替パラダイム」を乗り越えようとする試みが次々と登場する。以前、詳しく検討したので詳細は省くが²¹⁾、山内のいう「縄文式以来住民の血も文化も後代に続いている新しい考説」とは、これらの諸説にはかならない。

そして、こうした日本人起源論における「新しい考説」の潮流は、濱田の盟友であった清野謙次による原日本人説の提唱で一つのピークを迎えることになる。清野は、1919（大正8）年以降、彼が主宰する京都帝大医学部の研究室をあげて日本各地で縄文時代人骨を大量に収集し、その詳細な計測に基づく論考を『人類学雑誌』などに発表していく。それを著作としてまとめたのが1928（昭和3）年に刊行された『日本石器時代人研究』である。

清野説の登場が、当時の人類学者や考古学者に与えた衝撃は、選科で甲野の二年後輩であり、前述した人文研究会のメンバーでもある中谷治宇二郎が『人類学雑誌』に寄せた書評からうかがえる。すなわち、清野の著作について、中谷は「自分は先史考古学の研究を企て、ある者の一人であるから人種論は分らない、又急いで分る必要もないと思つてゐる」という一方、清野の「説は一々の科学的考察の下に到達されたもので、少しの予断をも許さない以上、これは当然の帰結」であり、「清野博士の獲得されたものは学説ではない、事実」とまでいう²²⁾。

しかもまた、ここで見逃せないのは、清野説が考古学に対してもつ意味についての中谷の認識である。中谷によると、「先住民族論が自然科学者の手に委ねられた時、当然起る変化」は、「先史考古学者が民族論から解放される事」だという。中谷は次のように述べている。

考古学者は何故土器片を見て人種を云々しなければならないか、過去文化の研究を目的とすべき学が人種の体質を述べなければ学としての成立が許されないのか。[中略] 本邦先史考古学が今日に至るまで未だ一つの学の姿を執れないのも、一つにはこの人種論が禍をしてゐたと考へられる。

以上の言明からは、当時の若手考古学者が、清野説に代表される新たな日本人起源論にインパクトを受けつつも、考古学の「人種論」「民族論」からの自立を志向していた状況が読み取れるだろう。

そして、こうした志向は、「土器片」の「編年」という方法論の確立を目指していた山内、甲野らにも共有されていたと考えられる。山内は、「日本遠古之文化」において、「縄文土器の文化圏と、その住民との運命が如何なる関係を持ったか」の解決のためには、なお多くの事実の集積とそ

の吟味が必要であると主張していたし²³⁾、甲野もまた、「まず編年的研究を全面的に推進させ、以て日本石器時代編年を確立することが目下の急務」だと述べていた²⁴⁾。こうした語りからは、「編年学派」が、土器の問題をその作り手としての「人種」「民族」などの問題と早急に結びつけることを禁欲し、まずは編年体系の確立に専心していた様子がうかがえる。

だが一方、ここで注意しなければならないのは、山内、甲野らの編年研究自体が、新世代の日本人起源論の共通理解を出発点としていたということである。「編年学派」は、土器型式の違い（変化）を「人種」の違いに還元するのではなく、文化の違い（変化）として解釈するという原則にこだわったが、その背景となっていたのは、先の山内の回想からもうかがえるように、新世代の研究者が切り開いた、縄文時代から現在へと至る「血」と「文化」の連続性という見方だったといつてよい。

もちろん、「血」と「文化」の連続性を想定するといっても、縄文文化と弥生文化の担い手をどう考えるかについては様々な立場がありえた。「人種」の問題を語ることに禁欲的であった一方、山内清男は、「日本遠古之文化」の補注（1939年に追記）で、例えば次のように述べている。

自分は茲で弥生式の文物を大陸系のもの、縄紋式からの伝統とすべきもの、特有の発達を示すもの——この三者に分けて考え、特に縄紋式からの伝統の存在を強調した心算である。それは当時の学界で大陸系文物の論議が流行して居ったのに対する警告でもあるが、自分が弥生式の母体は縄紋式にあると云う持説を有して居るので、その前提として指示したのである²⁵⁾。

「縄紋式」と「弥生式」の連続性を主張する山内の前提となっていたのは、工藤雅樹や大村裕が指摘するように、これら二つの文化の担い手における「人種」的同一性という信念だったと考えられる。すなわち、山内の理屈では、「縄紋式」から「弥生式」への移行は「大陸系文物」の影響を考えなくても説明可能であり、だとすれば縄文文化も弥生文化も同一の「人種」集団によって形成されたものということになるだろう。ここで詳しく論じる余裕はないが、山内は、先に触れたミネルヴァ論争の頃から、縄文文化と弥生文化の併存を認めず、日本列島の全域でほぼ同時期に縄文土器から弥生土器への移行が起こると主張していた²⁶⁾。こうした主張の前提として、日本列島における「人種」的同一性という信念があったと推測できるわけである²⁷⁾。

だが、この山内の言明からもうかがえるように、当時の考古学の主流は、弥生文化を大陸から伝播したものと捉えており、したがって、弥生文化を日本列島にもたらした「人種」の存在を想定するのも自然なことであった。この時期の考古学者が、大陸からの「人種」の渡来についてどう考えていたかについての検討は別の機会にゆずりたいが、改めて確認しておきたいのは、この時期には、明治期以来の「人種交替パラダイム」はもはや保持しがたくなっていたということである。したがって、たとえ大陸からの「人種」の渡来を想定したとしても、在来の「人種」と混血したと考えれば、「血」の連続性が担保されることも確かである²⁸⁾。

では、甲野勇はこうした問題についてどのように考えていたのだろうか。実は彼の「人種」に関する言明は、戦時中、意外な場所で語られることになる。

IV 甲野勇と大東亜共栄圏構想

先に述べたとおり、甲野は、1930年代後半から各種の雑誌編集に携わることになったが、どれも最終的に挫折に終わっていた。1941（昭和16）年12月8日、ついに太平洋戦争が始まり、翌

年、甲野は、小山栄三——先に触れた人文研究会、エイプ会以来の同志でもあった²⁹⁾——に誘われて、開戦に伴い新設された厚生省研究所人口民族部（厚生省人口研究所から改組）に嘱託として勤務するようになった³⁰⁾。

厚生省研究所での活動を知るための資料に乏しいため、詳細は定かではないが、研究所時代の甲野の業績として知られるのが、調査部長である小山栄三が企画し、甲野が図版の収集・解説を担当した『南方民族図譜』（1943年）と、同じ頃に社会教育協会で制作した「ジャワとスダの住民」というスライド映画である³¹⁾。これらは、縄文研究と並ぶ、甲野のもう一つの関心である民族誌における業績だが、前著は、「我国人士の南方に対する関心いよいよ深きを加ふる折」という状況で企画されたものである一方、「南方諸民族に関する正確なる認識が幾分でも高められる」よう、学問的記述に終始しており、特に時局におもねるような記述はみられない³²⁾。

だが、厚生省研究所時代の甲野には、従来ほとんど知られていない、もう一つ別の仕事が存在する。1943（昭和18）年、政府部内の秘密文書として100部だけ謄写版が配布された『大和民族を中核とした世界政策の検討』と題する文書への執筆である。全部で6巻、約3000頁に及ぶこの膨大な文書は、アメリカの歴史学者ジョン・ダワーの『容赦なき戦争』（2001年、原著1987年刊）で有名になったものだが、民族問題についての理論的考察や世界各地の民族事情から「大東亜建設計画」まで、当時、厚生省研究所に関わった研究者が総掛かりとなって書かれたものと考えられる³³⁾。

さて、甲野が執筆したと思われるのは、第三分冊第六篇「大和民族を中核とする世界政策」の第4節「大和民族の成立」の部分である（2200-2276頁）。まさしく「世界政策」の「中核」となる「大和民族」の成立過程を解説するために、甲野の考古学的知識が動員されたのであった。そこには、次のような記述がある。

近年に至って山内清男氏は関東及び東北地方に於て、八幡一郎氏は信濃に於て、私は関東地方に於て、各々の地方より発見する土器に就て調査した結果、[中略]異った型式的組列を持つ各個の型式群は、それぞれ多少づつ年代又は文化期を異にするらしい事が判明するに至った³⁴⁾。

ここでいう「私」が甲野であることは明らかであり、さらに、この後の縄文土器の分類・変遷に関する記述（2220-2250頁）は、一部の文章を省略しただけで、先に挙げた「関東地方に於ける縄文式石器時代文化の変遷」（1935年）の再掲となっている。この後に続く弥生時代、古墳時代に関する記述が甲野自身の書き下ろしと断定することはできないが、厚生省研究所につとめていた考古学者が甲野だけであることから、この部分も彼の執筆と考えてよいだろう。

そして、ここで興味深いのは、この文書では縄文土器や弥生土器を残した「民族」の問題についても推測が述べられていることである。上述したように、かつて自分が書いた文章をそのまま再掲しているのは、彼がさほど本気で仕事に取り組んでいなかった証拠だという推測も成り立つが、一方で、かつて1930年代に発表された縄文土器の編年研究では禁欲されていた「人種論」が展開されているのである。そこでは次のように述べられている（2266-2267頁）。

太古我国に於て生を享けた二つの生産様式を異にする民族——縄紋式文化民族と弥生式文化民族——は殆ど鬭争を行はずして、より進歩せる生産様式を獲得せる弥生式文化民族は、原始的生産様式にこそ依存しては居たが文化的には極めて高次的階梯に到達して居た縄紋式文化民族を全く同化し、後者は最も自然に前者のうちに、合し、そこに統一されたる大和民族の大本を形成したもので

ある。

ここで語られているのは、「縄紋人」と「弥生人」の間にはほとんど「闘争」が存在せず、前者が後者に「同化」されることで、「大和民族の大本」が形成されたという図式である。

残念ながら、こうした説明が何を典拠としているのかは不明だが、次に注目すべきは、これが、皇国史観に追随したと評される後藤守一が同時期に展開した議論と極めて類似していることである。後藤は、1940（昭和15）年、ラジオ放送で「上古時代文化史」に関する4回連続の放送を依頼され、その内容に補注を付したものが、1941（昭和16）年に『日本の文化 黎明篇』として刊行された。そこでは、「縄文人」と「弥生人」の関係について、次のように述べられている。

縄文式文化人は弥生式文化人との間に、血の闘争を試みた後に、住み慣れた故郷の地を逐はれて北方へと退いて行った先住民ではなく、接触の当初こそ多少の葛藤もあったでせうが、やがて両者は渾然として融合して行ったのでありませう。即ち後には、大和文化圏内の一員として、春光熾々たる生活を送ったのでせう。吾々の血の中にはこの縄文式文化人の血が多分に流れて居ると信じます。[中略] しかば、何故にこの縄文式文化人が弥生式文化に包摂せられるに至ったかといふと、縄文式文化人が狩猟や漁労に生活を求めてゐたのに対し、弥生式文化人は農業を営み、以て活生様式進展に一大徑庭をこの縄文式文化人との間にもうけるに至ったのであり [後略]³⁵⁾。

基本的図式が先の秘密文書中の記述と同じことは明らかだろう。残念ながら、甲野がいかなる経緯で後藤と類似した説明図式を記したのかは分からない³⁶⁾、こうした説明が同時期の考古学者の間でどの程度の広がりをもっていたかも確かめられてはいない。だが、「縄紋式文化民族」の「弥生式文化民族」による「同化」という論理は、明らかに「人種交替パラダイム」を脱しており、しかも両者が一時期、併存していたことを認めるという点では、「縄紋文化のある段階から大陸からの広大な伝播現象」（大塚達朗）として弥生文化を把握する、当時の考古学の趨勢と合致している³⁷⁾。

すなわち、先にみたとおり、山内清男は、縄文文化と弥生文化の併存を認めず、ほぼ同時期に縄文土器から弥生土器への移行が起こると主張していたが、後藤守一をはじめとする当時の大部分の考古学者は、縄文土器から弥生土器への移行時期には地域によって違いがあると捉え、両者が併存することを認めていた。「縄紋式文化民族」が「弥生式文化民族」によって「同化」されたとすれば、当然、縄文文化と弥生文化は一時期、併存しており、また地域によって、その移行（この場合は「同化」）時期に違いがあるということになる。

ただ、同時に気になるのは、この文書では、「弥生式文化民族」も「太古我国に於て生を享けた」と述べられ、大陸からの「人種」の渡来は想定されていない（もしくは曖昧化されている）ようにみえる点である。これは、文化の伝播はともあれ、「弥生人」（「弥生式文化民族」）の日本列島への渡来を認めてしまうと、大東亜共栄圏の指導者たる「日本人」のアイデンティティーが揺らいでしまうためとも推測される。

ともあれ、同じ「編年学派」と呼ばれる同志として出発しながら、太平洋戦争期、孤立した状態にあった山内と日本古代文化学会に参加していた甲野との間に、縄文文化の捉え方の上でも距離が生まれていたことは確かである³⁸⁾。山内は、戦中・戦後を通して、日本列島における縄文文化から弥生文化への（ほぼ）同時移行という自説にあくまでもこだわったが、甲野は、同時代の考古学の趨勢、さらには大東亜共栄圏構想の要請から一定の影響を受けて、彼なりの「人種論」を秘密文

書に記していたのである。

V むすびにかえて——リベラリスト・国学者・縄文研究の父

1945（昭和20）年8月15日、日本はポツダム宣言の受諾を発表し、太平洋戦争は終わった。甲野が勤務する厚生省研究所人口民族部は、厚生省人口問題研究所へと再び改組され（1946年5月）、当然のことながら、戦争遂行に関わる研究は中止された。甲野がいつまで研究所に勤務していたかは不明だが³⁹⁾、こうして彼の戦後の人生が始まる。

そして、戦後における甲野勇の原点として挙げられるのが、1946（昭和21）年に発表された「古代史と博物館」という論考である。甲野自身が編集に携わった雑誌『あんとろぼす』創刊号の「日本古代史への反省」という特集にむけて書かれたこの論考で、甲野は「戦時にあっては国史が国民精神運動の一方便として利用され、輝けるわれらの歴史、わが民族の優秀性は、至る所で独善的な国粹論者によって絶叫された」と述べている。こうした戦時下の古代史への反省から、甲野は、「科学的な古代史はまづ考古学的事実に立脚しなければなら」ず、そうした歴史教育に博物館が大きな役割を果たすべきだと主張したのであった⁴⁰⁾。

武井則道が指摘するとおり、戦後の甲野の生き方は、戦争に対する反省と使命感に基づいて方向付けられたことは確かである⁴¹⁾。1948（昭和23）年の武蔵野博物館（東京・井の頭自然文化園内）設立を皮切りに、生涯に計5つの博物館の設立運動に携わり、1954（昭和29）年から国立音楽大学教授として文化人類学を講じる一方、戦後、移り住んだ武蔵野（国立）を拠点に、地元の中高生に対する発掘の指導や、市民と協力して地域史研究を進めるなど、甲野は戦後考古学界の中心から距離を置き、在野に近い立場での活動を続けた。さらに、60年安保闘争の際には国会議事堂のデモに学生たちと参加、紀元節復活反対運動の発起人の一人にも名を連ねる（1966年）など、甲野の戦後の履歴からは、反骨の「リベラリスト」の姿が浮かび上がってくる。

ただし、ここで注目したいのは、敗戦後も甲野勇は後藤守一と活動を共にする機会が多かったという事実である。敗戦間もない1946（昭和21）年7月に、甲野は、三浦半島初声村（現・三浦市）で後藤、オランダ人神父のジェラード・グロート（1905-1970）⁴²⁾らとともに発掘調査を行い——この調査に参加した江坂輝弥（1919-）によれば、これは戦後最初の考古学的発掘調査であろうという——、さらに朝日新聞の後援を得て、日本古代文化学会の主催（責任者・後藤守一）で秋田県の大湯環状組遺跡の調査（同10月）も行っている⁴³⁾。また、同年、グロート神父が千葉県市川市に設立した日本考古学研究所に甲野、後藤ともに関わっており、その後、武蔵野博物館の設立運動などにも後藤の協力を仰いでいる⁴⁴⁾。

先にみたように、甲野と後藤の関係は、『ミネルヴァ』創刊時の頃までさかのぼるが、戦時中も、日本古代文化学会にとどまらず、両者は親しい間柄にあった。甲野は後藤の死後、戦時中の後藤との思い出を記している（1960年）。長くなるが、二人の人柄や関係がよく分かる文章なので、そのまま引いておきたい。なお、戦時中、甲野は荻窪、後藤は阿佐ヶ谷在住であった。

太平洋戦争たけなわの頃、後藤さんは町会長を押しつけられてしまった。これは頼みこまれば、いやといえないその性格をよく表している。しかし、夜といわず昼といわず襲いかかる空襲におびやかされ、人間らしい食物もなく、配給の大根のシッポ一本でも、目の色をかえていがみ合う町の人々を、なんとかなだめ、まとめてゆくには、うってつけの人柄である。当の御本人にとっては、迷惑この上ない役目だったにも係らず、実に熱心につとめられた。

朝のうちポーッと空襲警報がなると、臆病な私は研究所〔厚生省研究所——筆者注〕を休んでしまふ。しかし家にいてもつまらないので、後藤さんの所^{マア}えでかける。すると、たいいていカーキ色の国民服にゲートルという、いでたちで、机に向って原稿を書いておられる。〔中略〕どっかりあがりこんで、空襲はもうあきあきした話、戦前の喰物がうまかった話、買いだしの苦心談などを、一二時間して引上げるのだが、後藤さんはいつもニヤニヤ笑いながらの聞役だった。時によると、おしゃべりの最中にまたサイレンがなる。これを聞くと後藤さんは立ちあがって靴をはき、戦闘帽をかぶって町会事務所^{マア}え、私は宗匠頭巾にチビた下駄をひきずって家に急ぐ。こんなことが八月十五日まで続いた。八月十五日には、降参しろという陛下の放送を聞いてから、大いそぎで後藤邸にかけつけた。戦争で亡くなられた方には申訳けないが、今夜から安心してねられるという嬉しさで、いっばいだった。玄関にあらわれた後藤さんの脚にはゲートルがなかった。「君のいった通り負けたね」無然としてただ一言。私だって負けるのが好きでない。ただ国家という名に於て、見ず知らずの人々が殺しあう狂った世界から、一日も早く正常な人間の世界に、もどることを望んでいたのだが……真正面に全力をつくされたその顔を見たとき、何となくすまないような気がした⁴⁵⁾。

戦後になってから書かれた点は割り引いて考えねばならないが、ここには、「右翼学者の団体」と山内に罵倒された日本古代文化学会にともに参加しながらも、甲野と後藤の戦時体制に対する温度差が読み取れるだろう⁴⁶⁾。

また、ある意味で、甲野と後藤のその後の生き方は対照的にみえるのも確かである。先に述べたように、戦後、甲野が基本的に「野」の研究者の道を選んだのに対して、後藤は日本考古学の中核で活動し続けた。ここから、甲野による過去への反省の深さと、後藤の変わり身の早さを対比したくなる。だが、一見相容れないようにみえる甲野と後藤の友情が戦後も継続したこと、さらには「頼みこまれば、いやといえない」という後藤の性格と彼の「戦争協力」の関係についても見逃すべきではないと思われる。

では、甲野と山内の関係はどう考えればよいのだろうか。山内は、1934（昭和9）年に東北帝大の副手を辞して東京に戻って以降、在野の立場にとどまりながら、先史学会という学会を立ち上げ、ほぼ独力で雑誌『先史考古学』の刊行を続けた。山内の回想によると、甲野が史前学研究所をやめた頃（1935年）には、「相共に充分時間の余裕があった」ことから、親しくつきあっていたようだが⁴⁷⁾、その後、山内は、日本古代文化学会にも参加せず、当時の考古学の主流から孤立したところで、ほぼ筆を断った状態にあった。こうした姿勢に、彼なりの戦争に対する抵抗を読み取り、反戦主義者、平和主義者としての山内清男像を語ることも可能だろうし⁴⁸⁾、戦時中、孤立を守ったからこそ、戦後、山内は「文化戦犯」「右翼学者の団体」といった直截な表現をすることができたのも確かである。

しかも、ここで注目されるのが、戦時中、日本古代文化学会では、山内が整理した縄文土器の型式群の一部について、別遺跡名を冠して置き換えて流用していた、という大塚達朗の指摘である。大塚によれば、戦後、甲野勇が発表した『図解先史考古学入門』（1947年）に山内清男の縄文土器編年表を掲載しているのは、山内に対する「免罪符」であった可能性が高く、さらに1952（昭和27）年に発表した論考において、後藤守一は、戦時中の山内に対する非礼を謝罪したのだという⁴⁹⁾。

ここで大塚の指摘について検証する余裕はないが、敗戦を挟んで、縄文研究にパラダイム（大塚の言葉を借りれば「準拠参照枠」）の転換が起こり、そのことが戦後考古学における山内清男の特権化につながったことは確かである⁵⁰⁾。戦後、甲野勇が縄文研究の第一線から退却する一方で、山

内清男は、1946（昭和 21）年から東京大学理学部人類学教室の非常勤講師、さらに翌年には委託講師に就任し、この頃から、山内の学問的評価は急速に高まっていくのである。

注

- 1) 近藤義郎「戦後日本考古学の反省と課題」考古学研究会十周年記念論文編集委員会編『日本考古学の諸問題』（河出書房、1964年）311-338頁。
- 2) 春成秀爾『考古学者はどう生きたか—考古学と社会』（学生社、2003年）222頁。
- 3) 斎藤忠『日本考古学史』（吉川弘文館、1974年）など。
- 4) 坂詰秀一『太平洋戦争と考古学』（吉川弘文館、1997年）。
- 5) 溝口孝司「『縄文時代』の位置化」『研究の行方—何が分からなくて何をすべきか（縄文時代の考古学 12）』（同成社、2010年）97-112頁。なお、ここでは単純化するため、「弥生時代以降」と記したが、戦前の日本考古学において、縄文時代・弥生時代・古墳時代という時代区分が確立していたわけではない。
- 6) ただし、山内清男の研究は、縄文時代にとどまらない幅広い射程を持つものであり、佐原真によれば、生前、「日本遠古之文化」の熟読玩味は、皇国史観による神武紀元や神話の否定とつながる。それだけに、字句の表現に心した、と山内は述べていたという。佐原真「山内清男論」加藤他編『縄文時代研究史（縄文文化の研究 10）』（雄山閣、1984年）239頁。
- 7) 山内清男は現在でもきわめて高名な存在であり、八幡一郎も、後に日本考古学協会会長も務めた有力研究者として知られる。それに対して、戦後、甲野は考古学界の中心から離れた位置で活動を行ったことから、現在ではなかば忘れられた研究者となっている。本稿は、「戦争協力」の問題も含めて、甲野勇の再評価をも企図している。
- 8) 多摩考古学会編『甲野勇先生の歩み』（甲野勇先生の歩み刊行会、1968年）、梶国男『多摩に來た考古学者—甲野勇先生小伝』（ふだん記全国グループ、1979年）、武井則道「甲野勇論」加藤他、前掲『縄文時代研究史』88-96頁。
- 9) 民族学については、小規模ながら、京城帝大法文学部宗教社会学教室（1926年）、台北帝大文政学部土俗人種学教室（1928年）といった現地調査に関わる研究機関でも教育が行われていた。民族学を含む日本の人類学の制度化については、拙著『帝国日本と人類学者—1884-1952年』（勁草書房、2005年）を参照。
- 10) 大山柏と彼の史前学研究所の活動については、阿倍芳郎『失われた史前学—公爵大山柏と日本考古学』（岩波書店、2004年）を参照。
- 11) 三尾裕子「民族学から人類学へ—学問の再編と大学教育」山路勝彦編『日本の人類学—植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』（関西学院大学出版会、2011年）482頁。
- 12) 大村裕『日本先史考古学史の基礎研究—山内清男とその周辺の人々』（六一書房、2008年）38-39頁。
- 13) 『ドルメン』は1938（昭和 13）年に復刊されたが（第二期）、これも翌年には廃刊となった。
- 14) 「座談会：日本石器時代文化の源流と下限を語る」『ミネルヴァ』創刊号（1936年 2月）34-46頁。「ミネルヴァ論争」については、工藤雅樹『研究史—日本人種論』（吉川弘文館、1979年）269-289頁などを参照。
- 15) 後で検討する回想録の中で甲野勇は、「若いころ山内清男、八幡一郎両君と共に考えた、縄文式文化のクロノロジーを、いち早く理解して下さったのは後藤さんである」とも述べているから（甲野勇「おもいで」『武蔵野』40巻 1・2号合併号、武蔵野会、1960年、12頁）、三人の出会いは、この座談会よりさらに昔のことだろう。
- 16) 後藤守一の生涯と戦争協力の問題については、春成、前掲『考古学者はどう生きたか』150-182頁などを参照。
- 17) ただし、平田健によれば、「設立趣意書」や「編集後記」などに翼賛的な言葉が多数みられる一方、同時代の関係諸学会と比べて、特に日本古代文化学会の活動が戦時体制に迎合的とはいえないという。平田健「日本古代文化学会の活動とその評価をめぐって—戦時下の考古学史を理解するために」『古代文化』第 57 巻第 12 号（古代学協会、2005年）617-633頁。
- 18) 山内清男「縄文草創期の諸問題」『先史考古学論文集（二）』（示人社、1997年）430頁。初出は1969年。
- 19) 山内清男「鳥居博士と日本石器時代研究」『先史考古学論文集（一）』（示人社、1997年）。初出は1953年。
- 20) 幕末に生まれた小金井良清（1858年生まれ）、坪井正五郎（1863年生まれ）を日本の人類学・考古学における第一世代、明治 10 年代生まれの鳥居龍藏（1870年生まれ）を第二世代とすれば、いずれも 1880 年代に誕生した濱田耕作、長谷部言人、清野謙次、松本彦七郎を第三世代の研究者とみなすことができる。
- 21) 拙著、前掲『帝国日本と人類学者』および拙稿「日本人起源論と皇国史観—科学と神話のあいだ」金森修編『昭和前期の科学思想史』（勁草書房、2011年）243-310頁。
- 22) 中谷治宇二郎・大島昭義「清野謙次著—日本石器時代人研究」『人類学雑誌』第 43 巻第 7 号（1928年）318-

- 32頁。また同時期、同じく人文研究会のメンバーであった岡正雄（民族学者）も同様に、清野説を絶賛する書評を発表している。これらについては、拙稿、前掲「日本人起源論と皇国史観」を参照のこと。
- 23) 山内清男「日本遠古之文化」『先史考古学論文集（一）』（示人社、1997年）36頁、初出は1933年。
- 24) 甲野勇「遺物用途問題と編年」『ひだびと』第5年第11号（1937年）18-21頁。
- 25) 山内、前掲「日本遠古之文化」41頁。
- 26) 山内清男「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』第1巻第4号（1936年）1-10頁。
- 27) 工藤、前掲『研究史 日本人種論』、大村裕『日本先史考古学史の基礎研究』（六一書房、2008年）。なお、大村は、山内の土器編年と長谷部言人の日本人起源論（「変形説」）との整合性を指摘している。確かに、選科卒業後、山内が東北帝大医学部の長谷部のもとで土器研究に専念することになった経緯や、日本列島上での人種間の「混血」をほとんど否定し、石器時代から現在に至る「血」の連続性を唱える長谷部の理論（彼の理論は戦時中に整えられ、戦後になってから明確な形をもって登場した）に鑑みると、この指摘は一定の説得力をもっている。だが、山内の「日本遠古之文化」が登場した当時、圧倒的影響力をもっていたのは清野謙次の理論であったことを踏まえ、山内の議論を注意深くみると清野説との整合性が読み取れることも確かである。この問題については、また別の機会に論じたいと思う。
- 28) これが現在、人口に親炙している「縄文人」「弥生人」という図式につながるが、この問題は現在の人類学・考古学においても決着はついていない。
- 29) 小山栄三は、東京帝大文学部社会学科を卒業し、社会学の分野では、新聞学、宣伝研究などの研究者として知られる。だが、学生時代から人類学（「人種学」）・民族学への関心をもち、『人種学（総論）』（1929年）、『人種学（各論前篇）』（1931年）などの著作もある。戦時中は、厚生省研究所だけでなく、民族研究所などでも活動し、戦後は世論調査の分野で活躍した。小山の世論研究については、岡田直之他編『輿論研究と世論調査』（新曜社、2007年）などを参照。
- 30) 小山栄三「甲野君を悼む」前掲『甲野勇先生の歩み』70-71頁。厚生省人口問題研究所の活動については、高澤淳夫「戦時下日本における人口問題研究会と人口問題研究所」戦時下日本社会研究会編『戦時下の日本—昭和前期の歴史社会学』（行路社、1992年）103-120頁などを参照。
- 31) くになち郷土文化館編『企画展・甲野勇の軌跡』（くになち郷土文化館、1998年）。
- 32) 厚生省研究所人口民族部編『南方民族図譜』（国際報道株式会社、1943年）。
- 33) 以前、別稿で、本資料の民族政策に相当する部分の多くを小山栄三が書いたという推測を述べたことがある。拙稿「人種・民族・日本人—戦前日本の人類学と人種概念」竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う—西洋的パラダイムを超えて』（人文書院、2005年）229-254頁。
- 34) 『大和民族を中核とする世界政策の検討（其五）（民族人口政策資料第七巻）』（文生書院、1982年）2217-2218頁。
- 35) 後藤守一『日本の文化 黎明篇—考古学上より見たる日本上代文化の確立』（葦牙書房、1941年）60頁
- 36) ちなみに、古代文化学会の学会誌（『古代文化』第13巻第6号、1942年）において、甲野は後藤の『日本の文化 黎明篇』に対して好意的な書評を発表している。
- 37) 大塚達朗『縄文土器研究の新展開』（同成社、2000年）43頁。
- 38) しかもまた、大塚によれば、戦時中、古代文化学会では、かつて山内が編年的に整理した縄文土器の型式群の一部に別の遺跡名を冠して流用するといったことも行われていたのだという。大塚、前掲『縄文土器研究の新展開』
- 39) 少なくとも、『あんよろぼす』創刊号（1946年7月）巻末に掲載された「執筆者紹介」における肩書きは「人口問題研究所勤務」となっているが、その後、すぐに辞職したと思われる。
- 40) 甲野勇「古代史と博物館」『あんよろぼす』創刊号（1946年7月）31頁。
- 41) 武井、前掲『縄文時代研究史』93頁。
- 42) 戦前から宣教師として日本に赴任したが、考古学に関心を抱き、布教活動のかたわら発掘調査を行ったりしていた。グロート神父の生涯と活動については、南山大学人類学博物館編『明治大学博物館南山大学博物館合同特別展：人類史への挑戦 南山大学考古・民族コレクション』（南山大学人類学博物館、2012年）を参照。
- 43) 江坂輝弥「大湯環状組遺跡調査の頃」前掲『甲野勇先生の歩み』75-79頁。さらに、甲野は後藤守一と共編で『新制教育教授資料考古掛図』という書物も編んでいる。また、この時点ではまだ古代文化学会が存続していたことの意味を見逃すべきではないだろう。こうした混沌とした状況の中から、登呂遺跡発掘を契機に、日本考古学協会が誕生するが、その経緯についてはまだ多角的な検討が必要だと思われる。
- 44) 敗戦直後の混乱期に設立された当研究所には、多くの有力研究者が関わっていた。すなわち、研究員として甲野のほかに、八幡一郎、江坂輝弥らが名を連ね、顧問として長谷部言人、渋沢敬三（！）ら、さらに後藤守一は評議員長に就任している。創設直後、皇太子が施設見学に訪れるなど、当初、この研究所は日本を代表する考古学研究機関の一つとも目されたが、日本の考古学界が再建されるに伴い、やがて実質的活動を停止し、最終的に

は1958（昭和33）年、解体されて、収蔵資料は神言会が経営する南山大学人類学研究所に移管された。領塚正浩「ジェラード・グロート神父と日本考古学研究所—失われた考古学史を求めて」『鎌ヶ谷市史研究』9（1996年）35-54頁。さらに千葉縣市川市のホームページに領塚氏（私立市川考古博物館学芸員）が連載した「市川よみうり連載企画・歴史わが町」（<http://www.ichiyomi.co.jp/rekisi/index3.html>）も参考とした。

45) 甲野、前掲『武蔵野』12-13頁。

46) 春成、前掲『考古学者はどう生きたか』は、この回想から、「戦争批判派の甲野と、阿佐ヶ谷の町会長で出征軍人を激励して送り出す後藤とでは、生活感覚に雲泥の差があった」と総括している（107頁）。だが、両者の戦争への関わり方は単純に「批判派」と「肯定派」といった具合に二分できないと思われる。

47) 山内清男「新石器時代序説」前掲『先史・考古学論文集（一）』293頁。初出は1969（昭和44）年。

48) 春成、前掲『考古学者はどう生きたか』、大塚、前掲『縄紋土器研究の新展開』。山内は、若い頃、アナーキズム運動に参加したこともあったという。なお、本稿では触れなかったが、選科卒業後、人類学教室に残った八幡一郎は戦時中、海外の占領地などで調査にあたっていた。「戦争協力」という観点から考えれば、翼賛的な発言の有無以上に、調査内容と戦争との関係について検証する方が重要であることは確かである。

49) 大塚、前掲『縄紋土器研究の新展開』44-47頁。

50) こうした縄文研究におけるパラダイム転換については、また別稿で論じる予定である。